近世中期、松本藩領村々の占い文書・多賀吉祥坊の年箆文書を中心に

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>志村 洋</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>人文論究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2018年度</td>
</tr>
<tr>
<td>収録</td>
<td>URL: <a href="http://hdl.handle.net/10236/00026925">http://hdl.handle.net/10236/00026925</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
近世中期、松本藩領村々の占い文書

多賀吉祥坊の年篭文書を中心に

はじめて

旧家で古文書調査をしていると、時に思いがけない史料に出くわすことがある。これから紹介する年篭関係文書もその一つである。年篭と言えば小正月に神社で一年の五穀豊囲を占う占刀（筒刀）の神事などがまず想起されるが、他方で、村々の旧家には、一年間の運勢や吉凶・禁忌を書き記した文書史料も少なくなく伝来する。もともとそうした年篭は陰陽師や修行者、暦師・神職など様々な職分の者によって書かれてきたが、近世国家によって占刀が陰陽師の職分として公認されると、年篭をはじめとする占刀は陰陽師集団固有の職分のように意図されてきた。近世の陰陽師に関しては、すでに高埜利彦氏、林淳氏、梅田千尋氏らの研究によっているが、他に民俗学や暦学などの分野で、寄せてきたのは民俗学や暦学などの分野であり、「九九〇年代以降には『東方朔』や『大雑書』といった版本・写本類を題材にした新たな研究も登場している。『東方朔』は貞享三（一六八六）年版行の『東方朔秘伝伝抄』を代表
近世中期、松本藩領村々の古い文書

とする一連の陰陽道書のことであり、各地にその写本が残されていることから、日常生活上の吉凶・俗信などを記し、生活百科書である『大雑書』とともに、民衆世界における陰陽道知の伝播を物語るものとして注目されてきている。しかし、『方朔』や『大雑書』、さらには「都朝」という、本稿で紹介する年篳文書とではその史料形態や記載内容で少からぬ違いがある。そこで本稿では、従来ほとんど言及されることのなかった一紙物の古い文書である年篳文書について紹介してみたい。

一、文書の具体例

伊藤家、安曇郡上一木村（現大町市）清水家の三宅に伝来した史料である。松本藩は向日郡の安曇、筑摩郡並柳村（現松本市）一所領を持つ六十万石の諸代藩であり、明科村・並柳村・上一本木村は南北に長い松本藩領の中央・南部・北部にそれぞれ位置する。まずは明科村関家の『正德六年当卦御占』から紹介しよう。

明科村関家『正德六年当卦御占』

正月一日令次第、未申二向神ヲおみて吉、丑寅ノ方ヘ枕ヲして吉、同此方下向正そくけしやうヲして吉、同此

関七野右衛門尉

方々若水ヲ迎テ吉、辰ミノ向ひや酒ヲのミ始テ吉、朝ノゆわひ八辰ノ刻吉。

一、守本尊大日、御日待吉。
正月
きな
前
慎
十二月
ちか
人
こ
ること
ゆるさ
三月
い
四月
む
五月
え
六月
吉
七月
吉
八月
吉
九月
吉
十月
吉
十一月
吉
十二月
吉

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪

一、卯ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
二、己ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
三、丑ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
四、辰ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
五、巳ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
六、午ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
七、未ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
八、申ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
九、酉ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
十、戌ノ方神参悪・同此方於いきものヲ入テ悪
享保十（一七二五）年までの間、代々、明科を含む麻績経川手（三ヶ村を支配する組手）の地位にあった家で、

史料冒頭に名のある関七右衛門は当时の当主である。

この年撰は、まさに正月一日の吉方と社本尊を記した上で、正月から三月までの各月の吉凶・禁忌記している。

本史料で特徴的なのは、十二月正月、三月正月の「方角神」というように、隣り合う二ヶ月が同じ向きになることである。

周知の通り、伊勢戸をはじめとする頃歴では冒頭にその年の八将神や倉神等、金神の方位などが記載される。それらの方角神に対応した禁忌が記される。

それぞれの方角神に対応した禁忌が記される。十二月や八月、正月の吉凶・禁忌記している。その方角神の向きに並べられている。

十二月や八月、正月の吉凶・禁忌記している。その方角神の向きに並べられている。

これについて、辞書で吉凶の単位が吉凶指示の単位として用いられる。

これについては、辞書で吉凶の単位が吉凶指示の単位として用いられる。

この史料には、各月ごとの禁忌が記載されている。

これについては、辞書で吉凶の単位が吉凶指示の単位として用いられる。
公事し放たが大事なことであったかが窺える。関家が歴任した組手代は、川手三ヶ村と藩庁を媒介する現地の中間の役人に関して調査し、田組池田町の関家などとともに、戦国期から北安藤地域に勢力を張っていた地侍の組織を編成していた。史料が作成された十八世紀初頭においても、関家は下人を藩の都方役人や近村村の役人にお手伝いをしていた関家にとって、欲しい情報が並んでいたといえる。

関家に伝来した年賀には、川手三ヶ村の組手代役を歴任し、多くの下人・奉公人を抱えて一定の規模以上の人を支える経営を行っていた関家にとって、「秘書」は常に配慮が必要な場であった。

田組池田町の関家などとともに、戦国期から北安藤地域に勢力を張っていた地侍の組織を編成していた。史料が作成された十八世紀初頭においても、関家は下人を藩の都方役人や近村村の役人にお手伝いをしていた関家にとって、欲しい情報が並んでいたといえる。

関家に伝来した年賀には、川手三ヶ村の組手代役を歴任し、多くの下人・奉公人を抱えて一定の規模以上の人を支える経営を行っていた関家にとって、「秘書」は常に配慮が必要な場であった。

関家に伝来した年賀には、川手三ヶ村の組手代役を歴任し、多くの下人・奉公人を抱えて一定の規模以上の人を支える経営を行っていた関家にとって、「秘書」は常に配慮が必要な場であった。

関家に伝来した年賀には、川手三ヶ村の組手代役を歴任し、多くの下人・奉公人を抱えて一定の規模以上の人を支える経営を行っていた関家にとって、「秘書」は常に配慮が必要な場であった。

関家に伝来した年賀には、川手三ヶ村の組手代役を歴任し、多くの下人・奉公人を抱えて一定の規模以上の人を支える経営を行っていた関家にとって、「秘書」は常に配慮が必要な場であった。

関家に伝来した年賀には、川手三ヶ村の組手代役を歴任し、多くの下人・奉公人を抱えて一定の規模以上の人を支える経営を行っていた関家にとって、「秘書」は常に配慮が必要な場であった。
近世中期、松本藩領村々の占い文書

二、当年大日八日御祈よし、五月七月しょく遠有、かおし方ニトキキ有、九月十一月引風の御用心

代右衛門殿

一、当鬼十七日御祈よし、七月九月悪月也

二、來年三日御祈よし、三四四月五月友人同気遣よし

吉田願母

めたく候

次に紹介するのは筑摩郡並松村の伊藤家に伝わる冠保三（一七四三三年の史料①）である。並松村は松本藩出川組に

属する保期村（二三石余の村で、伊藤家は同村の役人であった。同家には左右同様の文書が元文四（二三九

年から延享三（一七四六年までにかけて六点伝来しているが、うち五点には作成者名が無く、前掲の冠保三年史料

の各名前が記されている。

その一連の年節文書では、料紙の要部分にある月日記載がみられる二支（今月吉日）という形で書かれており、一通の史料がなかに家族と言われる者御運が伝記されている事も多い。また、伊藤甚兵衛殿・御内方さま、代右衛門

殿八五郎殿というように、一通の史料がなかに家族と言われる者御運が伝記されている事も多い。また、伊藤甚兵衛殿・御内方さま、代右衛門
この『当卦』『来卦』の解釈はそれぞれに書かれた箇所の、最初の月の、特定の月における禁忌や用心事が書かれた箇所の、最終月の、最後の月の部分を『来卦』と『当卦』とで分けて整理したものですのである。表より、『当卦』では原則五月以後の御用心などのように、当月以降四月（場合により五月）までの禁忌が記されていることが明らかである。つまり、伊藤家の年箇は、原則五月にじまった翌年四月に終わる形式をとっていたのであり、さらに言えば、史料上毎年「今月吉日」と書かれていた作成月とは、実際にには各月をも五月（あるいは四月）であったと推測される。

御歳箇書付

一、当年乾卦八幡十五日御信心所し

二、六月讓人馬下々二亜り月、九十ニ月十二月御家内病なる事、別御御専二痛煩事ノ用心よし

清武武兵衛雅丈

表1 御年箇月別占い記事の記載範囲

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>名前</th>
<th>当卦</th>
<th>来卦</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>延享元年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>甚五兵衛</td>
<td>5月～12月</td>
<td>正月～4月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>御内方</td>
<td>6月～12月</td>
<td>2月～5月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>代右衛門</td>
<td>5月～9月</td>
<td>2月～5月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>八五郎</td>
<td>6月～10月</td>
<td>3月～5月</td>
</tr>
<tr>
<td>延享2年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>甚五兵衛</td>
<td>4月～12月</td>
<td>正月～4月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>御内方</td>
<td>5月～10月</td>
<td>2月～3月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>代右衛門</td>
<td>5月～11月</td>
<td>正月～2月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>八五郎</td>
<td>4月～8月</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>延享3年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>甚五兵衛</td>
<td>5月～12月</td>
<td>正月～4月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>御内方</td>
<td>5月～10月</td>
<td>2月～3月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>代右衛門</td>
<td>5月～12月</td>
<td>2月～3月</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）伊藤直彦氏所蔵文書写真（松本市文書館蔵）より作成。
この清水家の『御歳箋』は武兵衛・平兵衛という名前から判然して十七世紀末頃から十八世紀前半頃のものと推定される。史料中の『乾』と『兇』は八卦を構成する形態のものであり、渋川伊藤家の史料を同様に、各月の運勢がこれと同形式の年箋に表されている。御歳箋は、平兵衛殿という武兵衛家族の運勢を記載しており、その史料の末尾には、伊藤家の史料が五月中間に『乾』と『兇』が書かれており、この点も伊藤家の年箋と共通する。
表2 伊藤家の年箋にみえる用心事・禁忌の例

<table>
<thead>
<tr>
<th>伊藤 五郎 留殿</th>
<th>（元文4年）家内病難、田畑書物に間違い、そん、近敷人に御酒断、火の元ご用心、生物を不入、口舌、家内人馬にたたり／（寛保2年）病難、病人見廻り悪、御公次に間違い、家内火の元・うせ物、生類を不求、口舌、書物に間違い、家内に物言／（寛保3年）引風御用心、あやまち、口舌、生類を不入、御家内下にたたり月／（延享元年）あやまち、口舌、間違い、病難、生類不求／（延享2年）口舌・間違、病難、損失、下に災難、生類不入、馬人たたり／（延享3年）口舌、あやまち、家内にうせ物、公用に間違い、御病難、遠道夜路悪、生類不入</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>御内方さま</td>
<td>（元文4年）わざつあり、近敷人に驚き、いたみ、引風用心／（寛保2年）わざつあり、ちかき方に病人、いたみ、血の方の煩い、眼病／（寛保3年）食違い、近き方に驚き、引風の御用心、いたみ／（延享元年）ふけさめ頼、食事に御心付、いたみ、ちかき方に驚き、わざつあり／（延享2年）ふけさめ御用心、いたみ、眼病、ちかき方に驚き／（延享3年）ふけさめ頼い、ちかき方に驚き、食事に御用心</td>
</tr>
<tr>
<td>代右衛門殿</td>
<td>（元文4年）あやまち、不食ご用心、友人御酒断／（寛保2年）あやまち、物言、近敷人に御酒断、市町に御用心、友人に御火道／（寛保3年）わざつあり、あやまち、友人に御火道い／（延享元年）あやまち、人に気遣い、口舌、そん／（延享2年）あやまち、口舌／（延享3年）御病難、そん、友人に御酒断悪、あやまち</td>
</tr>
<tr>
<td>八五郎殿</td>
<td>（元文4年）あやまち／（寛保2年）たたり月</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）伊藤直彦氏所蔵文書写本353〜358（松本市文書館蔵）より作成。文言は適宜現代仮名づかいに直した。
と家全体に関する占いが記されているといえる。

第二に、その逆として、御内方・代右衛門・八五郎に関しては、各人に関わる吉凶禁忌だけが書かれている。たえば、御内方については、「わざらい」「いたみ」「血の方」「ふせさめ」「眼病」など、女性特有の病を含めた健康に関わることが主であり、「家内病難」や「家内にうせ物」といった家族全体に関する文言は見られない。代右衛門は家督相続以前の若者であるため、家の状況に適合的であるような文言が目立たない。

このように、伊藤家の年譜では、占いの対象となる家相それぞれの特徴——戸主を含む家族、年譜によるもの——に応じて、各々にふさわしい禁忌や用心事が書かれていたと考えられる。関家の例と同様に、年譜中の文言は受け取り手である若者や吉凶文書に、その家ごとの内動を反映させていたと考えるべきである。

また、実際の家事無事をみても、一つ一つの文言は受け取り手の実体を身に考えてきたのか、その時々の気のかりな事柄が反映されていたと考えるべきであろう。

③ 上一木村清水家『元禄拾一年之八卦』

平右衛門様

一、当句守本尊せ応いしほかつ廿三日、不寄何事二位高成人に御きづかい、又自家西か北、申・丑寅二面々りやう、盗人、くぜつ、此方力御用心、又従家西か北、丑寅二当り田畑ます事可有、へりて

ハワロし——しんく——有八家二たからをもとむる身ニしゅつせ有年也——無じんく——ニて八宝をうなふとゆふと
しなり

一、戌亥九方へやまび事みまわす。丑寅の方より生類いれす。みなみの方にて竹木をきらす

二、御つかしい日はうの日にとりの日万二よし、きらい日毎のへとら、かのへるわろし

三、四月万吉、五月万吉、六七月をす人。そんりょう、ものゆい事、二御用

一、十二月日、口合、請合御用

二、月方三吉、九月吉、十月霜月かぜのわすら、しよくさせう二用心、下人二御用

多賀

吉祥坊

松川組上本木村の清水家には、前に紹介したような当卦と卦型の年籤のほかに、当卦のみ（一年限り）の年籤も伝えている。右の史料がそのタイプであり、作成者は「多賀吉祥坊」である。年籤は「元禄七（一六九四）年から正徳二（一七一二）年まで計一四点存在し、作成月は二月ないし三月と記されている。この一四点の史料から明らかになる吉祥坊の年籤の特徴は次の通りである（表3）。

第一に、いずれも宛名は平右衛門様（殿）となっており、平右衛門の生年の干支で占すことは「大雑報」など他の占い書でもよくみられることがある。

第二に、書式としては、冒頭に千手観音や虚空蔵菩薩などその年の守本尊が記され、方角に関する吉凶や禁忌は「病事見舞わず」木を切らず」「畜類（生類）求めず」だけであり、

十四年を例に取ってみれば、年籤と伊勢籤とで共通する禁忌は「木を切らず」「畜類（生類）求めず」だけであり、しかもその方角はいずれも伊勢籤のそれとは違った方角になっている（表4）。吉祥坊の年籤と伊勢籤とでは占文の
### 表3 吉野家の関連史料

<table>
<thead>
<tr>
<th>年号</th>
<th>事件</th>
<th>役所</th>
<th>日期</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>元和2年</td>
<td>7月</td>
<td>岐阜</td>
<td>15日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>徳川家康、吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>元享年</td>
<td>1月</td>
<td>岐阜</td>
<td>1日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>康正2年</td>
<td>8月</td>
<td>岐阜</td>
<td>13日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>順正2年</td>
<td>10月</td>
<td>岐阜</td>
<td>10日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>真宗2年</td>
<td>11月</td>
<td>岐阜</td>
<td>20日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>文永8年</td>
<td>2月</td>
<td>岐阜</td>
<td>8日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

**方占**

<table>
<thead>
<tr>
<th>年号</th>
<th>事件</th>
<th>役所</th>
<th>日期</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>元和2年</td>
<td>7月</td>
<td>岐阜</td>
<td>15日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜家、吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>元享年</td>
<td>1月</td>
<td>岐阜</td>
<td>1日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>康正2年</td>
<td>8月</td>
<td>岐阜</td>
<td>13日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>順正2年</td>
<td>10月</td>
<td>岐阜</td>
<td>10日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>真宗2年</td>
<td>11月</td>
<td>岐阜</td>
<td>20日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>文永8年</td>
<td>2月</td>
<td>岐阜</td>
<td>8日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

**方占**

<table>
<thead>
<tr>
<th>年号</th>
<th>事件</th>
<th>役所</th>
<th>日期</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>元和2年</td>
<td>7月</td>
<td>岐阜</td>
<td>15日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>岐阜家、吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>元享年</td>
<td>1月</td>
<td>岐阜</td>
<td>1日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>康正2年</td>
<td>8月</td>
<td>岐阜</td>
<td>13日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>順正2年</td>
<td>10月</td>
<td>岐阜</td>
<td>10日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>真宗2年</td>
<td>11月</td>
<td>岐阜</td>
<td>20日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>文永8年</td>
<td>2月</td>
<td>岐阜</td>
<td>8日</td>
<td>岐阜家</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野家、西條家三者会合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>内容</td>
<td>元禄12年</td>
<td>元禄13年</td>
<td>元禄14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----------</td>
<td>----------</td>
<td>----------</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>伊勢霊</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>法花</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>沢前</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>水木切らず</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td>未</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

表4 伊勢霊と年鑑における方角占いの異同

（注）長野県立歴史館編『大町市清水家文書』より作成。
水家にとって作稲の種類選定が重要な関心事であったことを推測させる。もし水家が小作人からの定額小作料収入を経営の重点を置く質地大主であったならば、清永家にとって「つくりさ」の選択は大きな関心事とはならなかった。十七世紀の信州農村では手作業経営が広範に存在していたとされるが、慶安期の所持反別が六町三反を超える村に記した吉川坊は、手作業主の性格を色濃く持つ清永家のリクエストに応えて、かかる占文を書き残したと考えられる。

第六、暦註での「木を切らず」に相当する占文として、しばしば「くね木」を切らずという表現が用いられてくる。 「くね木」とは、屋敷の廃れに植えた屋敷林や風林を意味する言葉で、おもに信越地方や中国地方などで通用されている方言である。 「くね木」は近隣地方や中国地方などでは通常用られない言葉であり、多賀吉川坊の年築は受け取り手の住む地域の言葉に合わせて書かれていたことが分かる。

そこで、吉川坊の年築の中には、「せよ事望かのふ」（元禄十二年）、「貴人三向訴訟事御座候八、御用心」（元禄十年）、「貴人三向訴訟事御座候八」（元禄十天）、「貴人三向訴訟事御座候八、御用心」（元禄十天）などの文言が散見されるが、清永家文書の他の文書のなかには、訴訟の好適日だけを記録した次のような単一テーマの占文もある。

一、御詔日吉日、殊に書文定、三月十三日、廿四日五日、外二月五月廿五日、又八月八日ヲ結日と御心得可こうした訴訟好適日について、例えば近世の日常生活百科である「大雑観」では、「公事さたに吉日の事、正月と

有候

二月、三月ひつじなどのように、月ごとに十二支で日撰びとしている。清永家が訴訟以外の個々の案件に関しても具体的な占いを占者に求
めしていたことが想像される。

以上のように、多賀町内坊が清水家に残した年輪は、関家や伊藤家の年輪と同じように、清水家の社会的地位や個別経営状態という受け手側の立場や状況に応じた形で書かれていたということ。不特定多数向けの頒布や板本の二方様『大雑誌』などの違い、地域の旧家に残された年輪は、その家やその個人だけを対象にして書かれたものである。年輪の作成者（占者）と受取手（占那）との間には、直接的であり間接的である占考の前提としての方向性がある。この点を抜きにして家や地域社会に残された年輪の意味は理解できないだろう。

本章では中野両家の三家に伝来し、年輪文書について具体例を挙げて紹介してきた。では、それぞれの年輪の作成者はどういった素性の者であったろうか。また、受け取り手の側はどのような受取と読方をしていったのであろうか。

（一）年輪の作成者

前章では中野両家の三家に伝来した年輪文書について具体例を挙げて紹介してきた。では、それぞれの年輪の作成者はどういった素性の者であったろうか。また、受け取り手の側はどのような受取と読方をしていったのであろうか。

（二）占者と占那

前章では中野両家の三家に伝来した年輪文書について具体例を挙げて紹介してきた。では、それぞれの年輪の作成者はどういった素性の者であったろうか。また、受け取り手の側はどのような受取と読方をしていったのであろうか。

（五）年輪の作成者

前章では中野両家の三家に伝来した年輪文書について具体例を挙げて紹介してきた。では、それぞれの年輪の作成者はどういった素性の者であったろうか。また、受け取り手の側はどのような受取と読方をしていったのであろうか。
表5 宝永6年出川組の寺社・宗教者

<table>
<thead>
<tr>
<th>場所</th>
<th>名前</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>並柳村</td>
<td>醍醐寺（真言宗牛伏寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>平田村</td>
<td>念称寺（浄土宗知恩院末）</td>
</tr>
<tr>
<td>神戸村</td>
<td>長松寺（禅宗長国寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>二子村</td>
<td>慶林寺（浄土宗浄林寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>二子村</td>
<td>長福寺（浄土宗慶林寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>下神林村</td>
<td>長久寺（禅宗大昌寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>上神林村</td>
<td>福王寺（真言宗若沢寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>布川渡村</td>
<td>正山寺（禅宗長久寺末）</td>
</tr>
<tr>
<td>植宜宮隠</td>
<td>植宜市之進</td>
</tr>
<tr>
<td>植宜右京</td>
<td>植宜敬負</td>
</tr>
<tr>
<td>上神林村</td>
<td>山伏法学</td>
</tr>
<tr>
<td>平田村</td>
<td>山伏不動院</td>
</tr>
<tr>
<td>二子村</td>
<td>湯殿行人龍王海</td>
</tr>
<tr>
<td>二子村</td>
<td>湯殿行人養法院</td>
</tr>
<tr>
<td>出川町</td>
<td>禅宗道心一</td>
</tr>
<tr>
<td>出川町</td>
<td>禅宗道心禅入</td>
</tr>
<tr>
<td>上神林村</td>
<td>浄土宗道心見照</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（註）中田裕基氏所蔵文書写真29号（松本市文書館蔵）より作成。
一方、松田若狭については、正徳期に信州飯田藩領の鳴ケ嶺八幡宮神主に松田若狭という人物があり、神宮寺別当との間で山林樹木伐採を巡る争論を起こしたこと知られている。鳴ケ嶺八幡宮のある伊那地域と中信の松本地域は伊那街道で結ばれ、多くの人々の往来があった。伊那谷の神主による年祭が松本領北安曇の一農村に伝わってい

そこでは、多賀吉祥坊はどうであるか。多賀にあるからには近江国長上郡にある多賀大社の坊人が諸国の配下となる。教者が多賀大社を冠する寺社を採る、唯一の出川組の出川町に「多賀大神」という記載がされている。しかも、この多賀大明神は、宝永元（一七二四）年の松本藩謹慎地である「信府統記」によっ

切記載されておらず、別当寺などももない。吉祥坊は出川組の者と断定することは不可能である。他方、近江の史料には次のような記事を見出すことができる。

○ 寺院状之事

一、丹後中郡三重組之内明田村二居申柴吉祥坊枋子共二件真言宗二、当寺旦那二書無御座候、若他所より吉

利支丹と申柴人御座候、何時成共独著厳出経度可申分候、為後日宗宣請状仍如件

延宝戊年四月十五日

甲賀深川浄福寺

地蔵院書判
近世中期、松本藩領村々の占い文書

『五明山記』

宗仁坊老

右は多賀大社の「多賀観音院古記録卷二」に収録された史料である。「古来、延命長寿の神として信仰される多賀

大社では、別当寺として、本願の不動院を中心に般若院、成就院、観音院の四院、坊が存在し、その四院が大社の

修造と勧進を引き続けていた。各坊にはそれぞれ坊人──同宿輩、与力とし、と呼ばれる下級の社僧が隷属し、各

地で勧進活動を行っていた。坊人らは修験系の勧進聖であり、一坊におよそ四・五〇人程度存在したと言われる

詣者の宿坊の世話なども行っていた。彼らは代々本拠を本社から離れた近江国内の甲賀郡や蒲生郡内に持ち、池田・塩野

・砲尾・龍法師・万・野尻・新宮・大原・市ノ瀬等の組を形成していたとされる。

右の史料は、その四院のうちの観音院に対して、延宝二（一六七四）年に甲賀郡深川の浄福寺子院が出した寺請状

である。史料には、「丹後中郡三重院之内明田村二居申候吉祥坊弟子共」と書かれており、延宝二年段階で多賀大社の

坊人たる吉祥坊とその弟子が丹後国中郡（現京都府京丹後市）で活動していたことが分かる。この史料より、清水家

文書中の多賀吉祥坊とは多賀大社観音院配下の坊人であった可能性が浮上する。

信濃国内の多賀坊人の活動に関しては、古いところでは、正保四（一六四七）年に甲賀郡野尻村の越中という坊人

が多賀の観音院に提出した詣手形が残っている。それによれば、越中から観音院に数年間の無効状をした結果、正保

四の詣手形が元禄期頃には越中のように信濃边に活動場所を

巡り外勤を行うこともあった。こうしたことも多く、当時、吉慶坊の元禄期頃には越中のように信濃边に活動場所を

移し、守東や牛王印などを持参して勧進活動を行い、時に丹那の求めるに応じて占いを行っていたのではないだろうか。
また、松本藩領に関する所は、貞享三二（一六八六）年に安曇郡稲穂村の田沼を巡って甲賀郡大原中村の坊人高重が同郷の坊人善教を多賀大社の観音院に訴えた争論史料が残っている。相手方の善教は、稲穂村の貫那所を本国の裁定で折半したにも関わらず、依然「札人」していると貫重に注弾されるのは不当であるとし、稲穂村庄や市街門の義重、且那分之義二候へ、札造申義如何を奉存、宗仁坊へ御理申上、指図ニまかせ、翌年迄祈祷札造申候御事」と述べ、一択者且那分拾軒迄今年札乎はり申候、少も自余ヘ入不申候」と主張している。この争論からは、坊人は予め決めてあった公的に祈祷を依頼された場合は例外的に応じたことが明らかであり、且家としては持ち場の坊人以外に祈祷を依頼することのないことを尊び強調したと考えられる。多賀大社の坊人は修験系の勧進聖であり、神社の配膳と薬や延命酒など種々の土産物によって多賀信仰の拡大に努めていたが、且家が求めに応じて祈祷を占いも行っていたのである。

（２）地域社会の反応

本稿の最後に、年帳や多賀坊人に関する地域社会や且家側の受け止め方について簡単な触れてもあがる。受容のされ方は当該家の日記などが残っているれば分かりやすいため、あいにく伝存する年帳の年代に当たる時期の私記は三家ともに残されていない。あえて挙げるならば、次の享保十八（一七三三）年明科村関家の日記である。
近世中期、松本藩領村々の占い文書

儀左衛門申し候、

此儀本命今文五右衛門も毎不申候、

此金子之儀八去戊整月きよと代之金子二而御座候、

訃へ先輩儀十事、

儀二十一年儀左衛門先妻様二而多加二而一代うらないいたし儀等申し、

儀左衛門申し候、

右は享保十六年十二月二十三日の日記である。この日朝早く儀左衛門宅に直統軒という者を訪れ、前年暮の祈禱は、

料の払いについて即答に及んだ。直統軒は多賀坊の弟子もしくは縁のある宗教者と考えられ、

儀左衛門の儀十一に関する長命祈禱のことであった。史料によれば、

①多賀坊が前年冬に隣村の潮村に手紙を送って地元の民間宗教者が分担する形で行われたことなどが分かる。なお、

前年暮に行われた祈禱は、同家日記の享保十七年七月四日条にも、「多賀法印御出、当年八御弟子御向道、去冬御きつやのわけ段々申候得、

其存寄無之候二付、相談なし御きとういたし儀と申候と御申被成候より御返り被成候」とあることから、

多賀坊自身は無報酬のつもりであったことが分かる。
時、多賀大社の永代覆命講に必要な施物の金額はせいぜい一、二両であり、祈禱料の二〇両は法外とも言える金額で
あった。それでも、儀式の対象者である多賀大社に供する直銅軸に対して、何物も得えず意頼、金銀つく二両人芝のたすか

このように、松本地方でも多賀大社の方言があることから、現地での祈禱の一役襄っていたことが分か

プラトににおいて吉祥坊の年収以外に無条件に支払いしていたわけでは無く、地元の民間宗教者に提供する種々の

祈禱などとの関わりの中で取捨選択していた。地域別の家内も、信仰の厚薄が当然ではあるがあったのである。
既に前章において吉祥坊の年収以外に無条件に支払いしていたわけでは無く、地元の民間宗教者に提供する種々の

伊勢暦が消去されているが、右のようなお辞書は他の年収以外に無条件に支払いされていた。清流家文書の中には易文期以降の

ところ、この端裏書の三行目、四行目の文言に対して、伊勢暦表面の冒頭に刻まれた方角を、『大ため歩かれて方よし』を、他本をきら

つの方（むかひて大小へんせず、ちくいをもとめず）、「大ため歩かれて方よし」を、他本をきら

す（註、内は概要）と書かれている。すなわち、伊勢暦の本文では、「方角を求めは」は辰の方角

近世中期、松本藩領村々の占い文書
おわりに

以上、雑駄な史料紹介ではあったが、年箆文書の特徴について述べてきた。村々の旧家に残された年箆文書は、伊勢のための年箆や「東方朔」「大雑賀」など、出版物に比べて異なる、自身のための年箆を盛り込んだものであった。本稿で明らかにした年箆文書の特徴を幾つか列挙すると以下の通りになるだろう。

①正月は、正月の年箆と年箆と月の年箆の特徴を兼ねたもので、年箆の内容が書き出されたのは、こうした年箆の特徴的な意味を清まって、年箆文書の存在意義が明らかとなった。

②多くの場合、正月の年箆と月の年箆と月の年箆の特徴が書かれ、一年を通じた用意心を兼ねたものとされている。また、年箆の内容が書き出されたのは、こうした年箆の特別な意味を清まって、年箆文書の存在意義が明らかとなった。

③挙げられた用意心や年箆は、筆者のために書かれたもので、年箆の内容が書き出され、一年を通して会社や経営のできる立場に立つ必要がある。経手代や村役人を勤め、混乱したものは、年箆の内容が書き出されたものである。家族も対象にし、個人に対するまなざしを年箆からく取ることができること。

近世中期、松本藩領村々の古い文書
本稿で取り上げた年鑑は、尾張の隠居師や多賀大社の坊人など、作成者はそれぞれ異なっていたが、受け手側の個性や諸事情を時に個人レベルまで掘り下げて把握し、それに合わせて占っていたという点では通例していた。日常生活上的知恵や、物語の豊満に関する知識という一般的な事象にとどまらない、受け手にとってのオリジナル性が年鑑の最大の特徴であり、原本に於ける部分の文脈を読者としての生活の実態に合わせて解釈した小池淳一氏は、「近世に於ける宗教から日常の生活実践への変化－＜脱宗教化＞であると評した。そして、＜東方朝＞と＜大雑録＞と類似の民間の知識がどのように結体し内容をもって流用していたかという問題関心から、人々が＜東方朝＞を読み利用することに起きた出来事を再構していくことにとどまらず、ここに＜読書共同体＞の概念の成立を想定した。